

(実践報告)

新型コロナウイルス感染症の影響下における 基礎看護学実習 I の学びと課題

清水八恵子¹⁾ 水越秋峰¹⁾ 佐藤章伍¹⁾ 川越舞子¹⁾ 神谷美香¹⁾ 須賀京子¹⁾

I. はじめに

2020年度は新型コロナウイルス感染症の拡大による影響から、臨地実習の受け入れ中止が相次いだ。文部科学省が実施した「新型コロナウイルス感染症に関連する保健師助産師看護師養成学校における臨地実習等の実施状況調査(2020)」によると、大学における最終学年の看護師等養成課程の臨地実習実施状況は「すべて実施済み67.1%」「実習中または実施予定27.5%」「実習施設や時期について調整中の実習が1科目以上ある1.2%」であった。また、新型コロナウイルス感染症下における看護系大学の臨地実習の在り方に関する有識者会議の報告書(文部科学省, 2021)では、臨地実習の状況について「臨地実習の代替を多くの大学が実施し、看護の対象者と遠隔でのコミュニケーションや、臨地での実習と学内実習を組み合わせるなど、様々な工夫がなされていることが明らかになった。臨地以外の場で学ぶことには限界があるものの、このような工夫により、一定の教育効果を上げることができる」とし、多くの大学がいまだ続く新型コロナウイルス感染症の影響を受ける中で、試行錯誤を重ねた臨地実習の状況と学修効果について明らかにしている。

本学科では、1年次8月に学生にとって初めての臨地実習となる、基礎看護学実習 I を実施している。しかし、2020年度基礎看護学実習 I は、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、臨地実習施設の受け入れが困難となり学内実習に変更となった。そのため臨地実習の代替として実施した学内実習においても、実習目的・目標が達成できるよう、コミュニケーション能力の育成、日常生活援助の実施や療養環境の把握など、学内実習と臨地実習の乖離を極めて最小にし、可能な限り高い学修効果を目指した基礎看護学実習 I を構築した(清水ら, 2020)。

2021年度の基礎看護学実習 I は、A日程:8月2日(月)~6日(金)、B日程:8月23日(月)~27日(金)で計画されていた。しかし、この時期も新型コロナウイルスの感染拡大は続き、B日程開始前にはまん延防止等重点措置が発令された。医療機関においては面会制限、徹底した感染対策など、新型コロナウイルス感染症による医療への影響が続く中、感染対策の徹底と実習時間を短縮することにより、臨地実習が可能となった。1年次の学生にとっては初めての、そして時間に制約がある中での臨地実習である。入院患者の家族でさえ面会が制限されている状況下での実習であり、医療従事者として当然求められる感染対策の更なる徹底・管理が厳重となる等、学生にとっては緊張感が強い実習となることが予測された。このような学修環境の中で教員は、学生にどのように学びの環境を調整するか、重点的に何を学ばせるのか様々な検討を繰り返し、実習に臨んだ。ここに臨地での実習時間短縮という制約がある中での基礎看護学実習 I について、学修効果を高めるための検討や、臨地実習の中で得た学生の学びと今後の課題について報告する。

II. 実習目標の設定

臨地での実習時間短縮に加え、感染予防の徹底として、学生が直接患者と接する時間を必要最小限にすることが求められるという状況により、実習目標は変更を余儀なくされた。しかし、基礎看護学実習 I で学ぶべき内容が、従来の学習内容と大きく乖離することがなく、学生の学びに不利益が生じないよう検討を重ねた。2020年度および2021年度の実習目標を表1に示す。

1) 朝日大学保健医療学部看護学科(基礎看護学講座)

表1 実習目標

	2020年度	2021年度
1	対象者の療養生活環境について説明できる。	患者の療養生活環境について説明できる。
2	対象者および実習関係者と適切なコミュニケーションを図ることができる。	患者および実習で関わる全ての人と適切なコミュニケーションを図ることができる。
3	対象者とのコミュニケーションを通じて、対象者の思いを述べることができる。	
4	対象者の療養生活の実際を知り、生活援助の必要性を理解できる。	患者の療養生活の実際を知り、生活援助の必要性を理解することができる。
5	看護活動の実際を知り、基本となる生活援助を体験することができる。	看護活動の実際を見学し、実施された生活援助の根拠および患者への効果について考察することができる。
6	体験した生活援助の根拠と妥当性、および効果について考察することができる。	
7	看護師の役割と責任について、考えたことを述べるができる。	看護師の役割と責任について理解することができる。
8	看護学を学ぶ者としての自己の学習課題を述べるができる。	看護学を学ぶ者としての自己の課題を明確にすることができる。

Ⅲ. 臨地実習内容

2019年度の基礎看護学実習Ⅰでは、患者とのコミュニケーションの時間をできるだけ多くとり、臨地実習でバイタルサインの測定や日常生活援助の一部を実施した。しかし、2020年度は学内実習、そして2021年度は実習時間の短縮と感染対策の徹底が求められる実習となった。

2021年度は臨地での実習が可能となったものの、限られた臨地実習の時間で看護の実際を学ばせる必要がある。そのため、看護師の役割、コミュニケーション、看護活動の実際について学ぶ環境を改めて整える必要があった。感染予防の観点から「見学中心」を原則とし、行動目標および学習方法については、見学を通して「思考」を高めることを中心とする内容とした。コミュニケーションや療養環境、日常生活援助など「見学を通して考える」ことで、初めて看護の実際を目にする学生が実習目標を達成するためにどのように行動し学修に取り組むべきか検討を重ね、行動目標および学修方法を作成し、指導した(表2)。

臨地実習は午前中で終了し、午後は自己学修とした。自己学修では、臨地実習で見学した内容について既習の知識を活用して振り返り、時間をかけて実習記録を丁寧にまとめることとした。自己学修については、その日の学びをまとめ、本学の授業等で活用されている学習支援システムである Moodle を使用して提出することとした。

Ⅳ. Moodle における学生の学び

学修成果として Moodle に入力した学生の学びを表3に示す。

なお、意見については、今後の教育活動に活用すること、成績等には一切影響がない旨を口頭で説明した。

Ⅴ. 考察

Moodle における学びから、実習時間短縮という時間の制約はあったものの、実際に自分の目で見て感じたことや、看護師の患者へのかかわり方からコミュニケーションの重要性に改めて気づくなど、看護活動の実際を見学することによる学生の学びは多かった。そして、臨地実習が学内での学びをさらに深める学修機会であることは明らかであった。

表2 行動目標と学習方法(実習要項より一部抜粋)

実習目標	行動目標	学習方法
患者の療養生活環境について説明できる。	<ol style="list-style-type: none"> 1) 病院の機能・特徴について述べるができる。 2) 患者の療養生活を支える各部門や職種について述べるができる。 3) 病棟の構造と機能を述べるができる。 4) 療養生活の人的・物理的環境について述べるができる。 	<ol style="list-style-type: none"> ①病院の機能・特徴について説明を受ける。 ②病棟の構造と機能を理解するため、病棟内のオリエンテーションを受ける。 ③オリエンテーションを通して、療養生活環境について考える。
患者および実習で関わる全ての人と適切なコミュニケーションを図ることができる。	<ol style="list-style-type: none"> 1) 自ら挨拶をすることができる。 2) 周囲の状況や環境に応じて、自己の立ち位置、声の大きさなどについて配慮できる。 3) 患者の話を傾聴できる。 4) 適切な言葉遣いができる。 	<ol style="list-style-type: none"> ①挨拶(自己紹介)を行う。 ②周囲の状況に配慮して看護師と患者とのコミュニケーションを見学し、コミュニケーション技法について考える。 ③看護師と患者とのコミュニケーションの見学を通して患者の話を傾聴する。 ④コミュニケーション時の適切な言葉遣いについて考える。
患者の療養生活の実際を知り、生活援助の必要性を理解することができる。	<ol style="list-style-type: none"> 1) 患者に必要な日常生活援助について述べるができる。 	<ol style="list-style-type: none"> ①患者の日常生活の状況について、看護師から情報を得る。 ②看護師の看護活動を見学し、患者にとっての看護活動の意味について考える。
看護活動の実際を見学し、実施された生活援助の根拠および患者への効果について考察することができる。	<ol style="list-style-type: none"> 1) 看護師が実施した看護援助の根拠について、目的を明確にして看護師にインタビューすることができる。 2) 看護師に同行して見学した看護援助の根拠と患者への効果について述べるができる。 3) 看護師が実施する看護援助やコミュニケーションを通して考えた看護の意味について述べるができる。 	<ol style="list-style-type: none"> ①看護師へのインタビューを行い、実施された生活援助の根拠と患者への効果を理解する。 ②看護師へのインタビューを通して患者に必要な日常生活援助について考える。
看護師の役割と責任について理解することができる。	<ol style="list-style-type: none"> 1) 看護師の役割について述べるができる。 2) 看護師の責任について述べるができる。 	<ol style="list-style-type: none"> ①看護師の患者への関わりの見学を通して、患者の療養生活を支える看護師の役割について考える。 ②看護活動の実際の見学を通して、看護師の責任について考える。
看護学を学ぶ者としての自己の課題を明確にすることができる。	<ol style="list-style-type: none"> 1) 文献等を活用して学びを深めることができる。 2) グループメンバー間で学んだ内容を共有することができる。 3) 学内報告会で他のグループの発表を通して学んだことを述べるができる。 4) 看護職を目指す者として自己の課題を述べるができる。 	<ol style="list-style-type: none"> ①見学した看護活動の実際について文献を活用しながら自己の考えをまとめる。 ②臨地でのカンファレンスで学びを共有する。 ③学内報告会で学びを共有する。 ④学修内容を振り返るとともに、今後の学修に向けて自己の課題について考える。

表3 Moodleにおける学生の学び(一部抜粋)

療養環境	<p>ナースコールの置いてある位置を患者に伝えることで、患者にとって安心した環境を整えることが大切。窓が大部屋のどのベッドにもあたるように設計されていた。また、騒音やプライバシーに配慮して壁がつくられ、患者の安楽につながっていた。</p> <p>半身麻痺などにも対応したトイレや車椅子のまま体重が量れる体重計、ストレッチャーのままでお風呂に入れる機械浴があり、配慮された環境だった。</p>
コミュニケーション	<p>看護師は難聴がある患者に伝わるように肩に触りながら声をかけたり、大きな声や耳元で話すなど工夫していた。看護師は患者を否定しない言葉を使っていた。</p> <p>患者の視線に合わせてコミュニケーションをとることが重要だと感じた。</p> <p>会話だけがコミュニケーションではなく、患者の表情や顔色を見て不安がないかなどを読み取る非言語コミュニケーションも看護の援助にとって重要だと学んだ。</p> <p>否定的なことばかりではなく根拠を話しながら肯定して話すことを大切にしたい。</p>

生活援助の必要性	患者自身が出来ることは時間がかかっても自分でやらせてもらうことが大切だということ学んだ。 全身清拭では、患者さん自身が拭けるところは拭いてもらい、出来ないところは手伝ったりして患者さんへの自立支援が大切。
看護活動の実際	自立している人には、食事表などを自分で記録してもらったり患者自身が出来ることは時間がかかっても自分でやらせてもらうよう援助していた。 患者それぞれで関わり方を変えて援助を行っていたことから、その人にあったケアをする事が大切であり、食事ひとつでも配慮を行う事が大切だと学んだ。 講義の中で学んだ患者にできることをやらせてもらうということを実際の現場でも実践していて大切なことだとも学んだ。
看護師の役割と責任	多職種との連携が大切で看護師だけでは看護はできないということを実際に感じる事ができた。 他の看護師と意見を共有し患者のことを理解してから援助をすることで、患者に安全安楽な援助ができると感じた。 カンファレンスや申し送りで情報を収集し共有することが大切で、ミスを防ぐためにも重要であると考えた。 薬の本人確認や、様々な場でのダブルチェック、モニターの同名の表記が目立つように色付けされ、誤りをしないための工夫が複数あった。このことから、間違えたら命に支障をきたす職業であるということであらためて感じた。 情報を共有し、患者がこれからどういう治療やケアをしていくべきなのかを話し合っていた。 患者の小さな変化に気づくためには、観察力が必要である。観察力を身につけることも看護師という仕事の責任感だと思った。
自己の課題	命と隣り合わせの看護の場では「学生だから」が通用しない場であるという看護の責任感を実際に臨床の場で学んだ。 新型コロナウイルスの影響が収まったあとの実習や、将来看護師になったときに責任を果たすためにもこれからの学修を正確に行っていく必要があると考えた。 自分のなりたい看護師像が膨らんだ。 患者の気持ちをくみとった声かけができるようになりたいと思った。

新型コロナウイルス感染症の影響を受ける前の実習とは様々な点で異なる実習内容と指導体制が求められる。従来は臨地実習だからこそ、できるだけ看護の実践を体験することを重視していた。「看護を実践すること」はもちろん重要であるが、見学が中心の実習環境であっても安心・安全な環境、相手を思いやるコミュニケーション、個々の患者に応じた看護の実際やかかわり方、多職種との連携を含めた看護師の役割と責任など、今回の実習でも数多くの学びを得たことが明らかとなった。看護師の自然ではあるが意図的なかかわり方を学修場面として学生に見学させることで学生の「気づき」は「学び」へと変わり、見学中心の環境の中でも学修環境を工夫することで目標到達は可能であると考えた。同時に、初めて臨地実習に臨む学生の学修効果を高めるためには、臨地実習指導者との調整が重要であることも再確認された。

「看護」は実践の科学であり、臨地実習なくして学ぶことは難しい。しかし「看護を行っている現場を遠隔で見学する」「看護の対象者と遠隔でコミュニケーション・情報収集する」「病院と協力し、学内で受け持ち患者の電子カルテが閲覧できるよう環境を調整した」(文部科学省, 2020)と述べられているように、講義のみならず、臨地実習においてもオンラインを取り入れたハイブリッド形式の学修方法が導入されつつある。リアルタイムでの臨地の状況を活かしながら学内で学ぶことができる学修環境は、臨地実習と同等とまでは言えないものの、高い教育効果が得られる可能性があると考えた。

また、菅原ら(2020)は、「学修状況は違うものの、日本の看護教育においてシミュレーション教育の導入も進められている。米国の看護教育におけるシミュレーション教育の発展は、入院期間の短縮に伴い臨地実習期間が少なくなったことや、医療技術の進歩や高度な医療環境、患者の権利等により実際の医療現場において看護実践を行うことが難しい状況となっていることから始まっている。」と述べている。そして、臨地での実習が難しいという状況に関して米国と酷似していると指摘し、この機会にシミュレーション教育を導入し、実習施設の受け入れ状況に左右されにくいカリキュラムの構築の必要性について問題提起している。

これらのことから、新型コロナウイルス感染症の拡大による臨地実習への影響は、従来の学修環境の転換期であり、看護基礎教育における臨地実習のあり方について見直す機会であるのではないかと考える。

VI. 今後の課題

新型コロナウイルス感染症は、変異株の出現など約2年が経過した今でもいつ収束するか不明であり、看護基礎教育における臨地実習への影響もいつまで続くのか、先が見えない状況である。しかし、どのような状況であっても、可能な限り臨地実習に相当する学修内容を確保する必要がある。そのためには、実習施設との連携・調整も含め臨地実習の在り方について再考することが必要であり、2021年度の基礎看護学実習 I の実施内容や学生の学びは一つの成果である。臨地実習においても、Moodle等の学習支援システムの有効活用などに加え、オンライン等を活用したハイブリッド形式の学修方法を積極的に取り入れ、効果的な教育方法のあり方について継続して検討していくことが今後の課題である。

文 献

- 文部科学省 (2020). 新型コロナウイルスに関連する保健師助産師看護師養成学校における臨地実習等の実施状況調査.
- 文部科学省 (2021). 新型コロナウイルス感染症下における看護系大学の臨地実習の在り方に関する有識者会議 報告書 看護系大学における臨地実習の教育の質の維持・向上について (看護学教育の在り方に関する検討会).
- 清水八恵子, 森本直樹, 佐藤章伍, 水越秋峰, 神谷美香, 須賀京子 (2020). 基礎看護学実習 I (学内実習) における学びと成果. 朝日大学保健医療学部看護学科紀要, 第7号, 15-20.
- 菅原啓太, 上田貴子, 小池 敦, 大川明子, 菱沼典子 (2020). 新型コロナウイルス感染症状況下での臨地実習の実施状況及び今後の課題—公立大学協会看護保健医療部会による調査結果から (第2報)—. 三重県立看護大学紀要, 特別号, 35-42.